

実験小説名作選



実験小説名作選

筒井康隆選

集英社

(文庫・7/25刊・¥400)

一読、段差を感じた。段差というのは、「実験」の意味が持つ差異である。つまるところ、実験の良否、どれだけ本道を踏み外すかの度合いだと思う。編者の意図もあって、SFと純文学とが、ほぼ交互に並べられているから、踏み外し方の違いは、いやでも目につくだろう。もっとも、主題が同じというわけでもなく、どこがどう違うか具体的には分かりにくい。ただ、その差の一つは、観念や法則に対する、発想の相違にある。

例えば、かんべむさし「集中講義」の、音の流れとしてののみ有意味な法則性、荒巻義雄「大いなる正午」の、高次元世界の時間という観念。一方、純文測、梶井基次郎「Kの昇天」や伊藤整「M百貨店」などは、やはり主観的に情感の流れを追っている。もちろん、作家の個性や時代背景もあるが、SFは理詰めに道を外そうとするし、純文は現実と心象との対応関係を、別の形に置き換えることから、実験をはじめようとする。既存の小説に分類されないものが、実験の価値である以上、どこを本道に見るかで、手法が違ってくるのは、当たり前かもしれない。いずれにせよ、さまざまな手法が窺えて面白い。

(俊)